



角松敏生

TOSHIKI KADOMATSU Performance 2013 "Tripod IV"

DATE: 2013年7月14日(日)

PLACE: 軽井沢大賀ホール

PHOTO: 小原啓樹

キャッチーな歌と高品位なサウンドで幅広い層から支持されている角松敏生
彼は毎年夏に軽井沢大賀ホールで定例のコンサートを開催しており
今年も去る7月13日と14日に2デイズで公演を行った
本稿では2日目のステージを音響システムの面からレポートしていく



▲FOHのオペレートを務めたエンジニア、山寺紀康氏。東京のPAカンパニー、フルスペックに所属し、2000年代半ばから約8年にわたり角松敏生のコンサートPAを担当している

◀会場となった軽井沢大賀ホール。空間全体で均一な音響効果が得られるよう設計されており、普段はクラシックなどアコースティックな音楽のコンサートに使われることが多い。形状は五角形で、ステージはその頂点付近に位置。1階はステージ前方に660席が設けられ、2階にはステージ後方の合唱席を含む164席が周囲360°を囲む形で用意されている。今回はすべての席に観客が動員されたため、スピーカーの配置に工夫を凝らしたという



▲FOHではSOUNDCRAFTの64chデジタル卓、V16が使用された。V16は、ステージ上のサウンドを入力するためのステージ・ボックス、40ビット浮動小数点演算で信号を処理するDSPエンジンを内蔵したローカル・ボックス、フェーダー×32本などの操作子を備えたコントロール・サーフェスから構成されている。写真はコントロール・サーフェスだ



▲写真右のラックには、スピーカー・プロセッサのXTA ELECTRONICS DP224やグラフィックEQのKLARK TEKNIK DN300×2台、DN3600などを設置

◀ラックには、上からAMEK System 9098 EQやコンプ/リミッターのUREI 1176LN、パラメトリックEQのAMEK Medici、コンプ/リミッター/ディエッサーのBSS DPR-402、パラメトリックEQのVALLEY PEOPLE PR-2A、グラフィックEQのKLARK TEKNIK DN30/30、パラメトリックEQのKLARK TEKNIK DN410×2台を設置。山寺氏はDN30/30とDN410を組み合わせ、ピアノの音を細かく調整していた

■ ステージの周囲360°の客席に向けてスピーカーの配置を工夫 ■

1981年のデビュー以降、「Girl in the Box〜22時までの君は…」や「Tokyo Tower」など、ソウル・ミュージック／ファンク・テイストの名曲を生み出してきたシンガー・ソングライター＝角松敏生。ソロ活動のほかプロデューサーとしての実績も豊富で、杏里「悲しみがとまらない」や中山美穂「You're My Only Shinin' Star」といった大ヒット曲を手掛けてきた。さらに、V6ら多くのアーティストにカバーされた「WAになっておどろろ」の作詞／作曲者としても知られ、音楽通からライト・リスナーまで幅広い層に支持されている。

角松は、2007年に軽井沢大賀ホールでコンサートを開催。2009年以降は、毎年夏恒例の企画として展開してきた。今回の『TOSHIKI KADOMATSU Performance 2013 "Tripod IV"』はそのシリーズ第6回で、去る7月13日と14日に2デイズとして敢行。編集部が取材したのは、2日目の公演だ。大賀ホールはステージが客席に囲まれた五角形のホールで、ステージ前方と両脇に合計660の1階席、周囲360°に合計164の2階席を設けており、クラシックなどアコースティックな音楽のコンサートに使われることが多い。

当日のバンド編成は、ボーカルとギターを担当する角松に、小林信吾／友成好宏／森俊之という3名のキーボーディストを加えたもの。ステージにはSTEINWAYとYAMAHAのグランド・ピアノが1台ずつと、HAMMOND L-112やMOOG Minimoog Voyager Electric Blue Edition、RHODES Mark I Suitcaseなどの鍵盤類、MOTU DPで打ち込まれたドラムやベースを鳴らすためのAPPLE iMacやMOTU 828 MK3 Hybridが設置され、信号の数は48chにのぼった。

FOHのオペレートを務めたのは東京のPAカンパニー、フルスペックに所属するエンジニアの山寺紀康氏。氏は、2000年代半ばから現在まで約8年にわたり角松のライブPAを手掛けており、大賀ホールでの定例コンサートも2007年の第1回から担当してきた。先述の通り、大賀ホールはクラシック音楽などにマッチした空間。そして、クラシック・ホールと言えば管弦などの生楽器がよく響くように設計されているところが多い。しかし、山寺氏は大賀ホールの音響特性について「素晴らしい響きですが、クラシック・ホールとしては残響成分の多い方ではないと思います。ポップスにも対応できる空間でしょう」と語る。

FOHの卓として使用されたのは、SOUNDCRAFTの64chデジタル卓V16。V16は、ステージ上

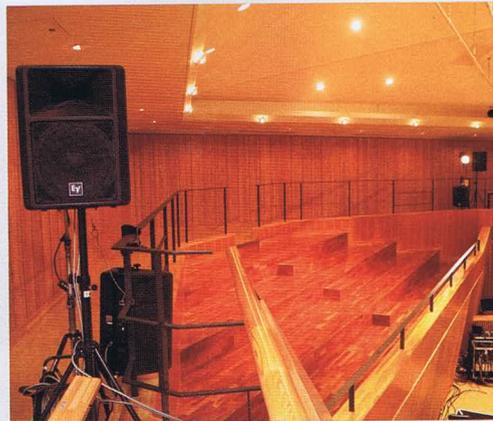
のサウンドを入力するためのステージ・ボックスと、信号処理を行うDSPエンジンや入出力端子を統合したローカル・ボックス、そしてフェーダーなどの操作子を備えたコントロール・サーフェスから構成されている。ステージ上の48chの信号は、ステージ・ボックスでFOH／モニター用に分岐した後、光ファイバーを介してそれぞれに伝送された。FOHのローカル・ボックスには、改造を施したというAMEK System 9098 EQやコンプ/リミッターのUREI 1176LN、AMEK Medici The Equaliser、コンプ/リミッター/ディエッサーのBSS DPR-402、EQのVALLEY PEOPLE PR-2Aといったアウトボードをインサート。それぞれの役割について、山寺氏に尋ねてみた。

「1176LNとMedici The Equaliser、そしてSystem 9098 EQは、角松さんのボーカルに使っています。PAでは、オーバー・レベルを防ぐためにコンプやリミッターを使うことが多いんですけど、1176LNは声を抑えるのではなく「際立たせる」ために使用しているんです。深めにリミッティングしてもかきり過ぎたような音にならず、歌のニュアンスを伝えやすい。DPR-402とPR-2Aは、打ち込みのキック／ベース用です。デジタル卓を通した音は、高域は奇麗に伸びるんですけど、中低域の粘りが感じられなくなることがあります。



▲メイン・スピーカーの周りには、ステージ両脇の客席やステージの演奏者に向けてNEXOの2ウェイ・スピーカーPS15を設置

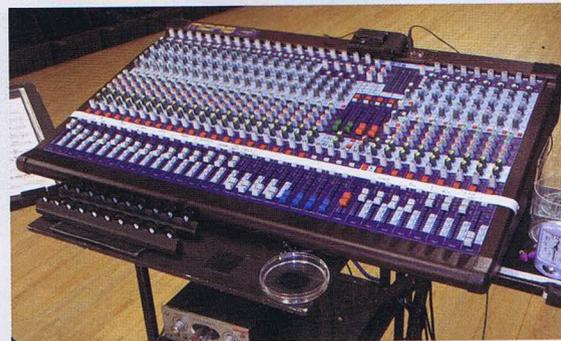
▲メイン・スピーカーはNEXO Alphaシリーズを使用。同軸の中域用モジュールAlpha M3-CFと低域用のAlpha B1-CF、サブウーファのAlpha S2-CFを組み合わせたものが左右に3列ずつ配置されたことで、ステージ前方の客席に満遍なく音が行き渡った



▲2階席には、大賀ホールに常設されていたELECTRO-VOICEの2ウェイ・スピーカーSX300を設置。写真左上に写るのは、会場の周囲360°を囲む立ち見席のためのもので、左下や奥に見えるのはステージ後方の合唱席に座る観客へ向けたものだ



▲角松のボーカル・マイクは、山寺氏の所有するNEUMANN KMS105を使用



▲角松は、MIDASのアナログ卓Venice320を32chのキュー・ボックスとして使用。本機は、もともと山寺氏が予備のFOH卓として持ち込んだものだったが、プランの変更によりステージ上で使われることとなった



▲角松の足元に設置されたウェッジ・モニターは、15インチ・ウーファーと2インチ・ドライバーを備えた2ウェイ。山寺氏によると、両耳にインイア・モニターを装着していても、ウェッジの音は「体で感じる音」として機能するという



▲本番ではウェッジ・モニターからの出力がごく小さな音量に抑えられ、主に両耳のインイア・モニターが使われた。角松の持ち場には、ワイアレス・インイア・モニター・システムの送信機MIPRO MT-808Tのほか、DIのAVALON DESIGN U5やリミッターのRETROSPEC The Squeeze Box、プリアンプのCREWS MANIA C SOUND DPA-2Aなどギター用のツールも設置

だから、アンサンブルの中でキーとなる歌やキック、ベース、それからピアノなどはアウトボードを通し、アナログ的な厚みを出そうとしています」

VI6でミックスされたサウンドは、スピーカー・プロセッサのNEXO NX242ES4×2台にアナログ入力され、それぞれから超低域/低域/中～高域用の信号がAMCRON Macro-Tech VZシリーズなどパワー・アンプ群にアナログ出力された。ここで注目すべきは、スピーカーの配置方法だ。先述の通り、大賀ホールではステージの周囲360°に客席が設けられている。ステージ前方用のメイン・スピーカーとしてはNEXO Alphaシリーズが使用されたが、ほかにもステージ後方の2階席やステージ両脇の1階席のために、エリア専用のスピーカーが設置された。

「それぞれモデルが異なっているのですが、どのスピーカーからも同じような音質で聴こえるよう、EQで出音を細かくチューニングしています。僕はPAを行うとき、会場中を同じ音の空間にしたいと考えているんです。どの位置にいる観客にも、音楽が同じ聴こえ方で届くようにしたいわけです。そのためのチューニングであり、スピーカー配置です。例えばAlphaシリーズに関してはサブロー/ロー/ミッドハイ用のスピーカー・モジュールを組み合わせたものをステージの左

右に3列ずつスタックしています。この配置により、各モジュールの音量を抑えながらエリア・カバーすることが可能になるんです」

■ ピアノは2本のC414 B-ULSとSM57 YAMAHIKOのピックアップで收音 ■

モニター卓は、FOHと同様にVI6を使用。そこから各演奏者にモニター用の音が送られたわけだが、今回はウェッジ・モニターの出力をごく小さな音量に抑え、インイア型のイヤフォンを両耳に装着するというモニター方法が採用された。角松の持ち場には、ワイアレス・インイア・モニター・システムの送信機MIPRO MT-808Tのほか、MIDASのアナログ卓Venice320が鎮座。本機には、ボーカルやバックিংを含む30ch近い数の信号が立ち上がり、多チャンネルのキュー・ボックスとして使用された。

「大賀ホールでは、ウェッジ・モニターから大きな音を出すと、それがステージ後方の客席へダイレクトに伝わってしまいます。今回、角松さんにはピアノの生音を可能な限りそのまま聴かせたいという意向があったので、片耳のインイア・モニター+ウェッジという通常のモニター・システムから両耳のインイア・モニターに変更し、ウェッジの音量は最小限に抑えました。その結果「ステージ

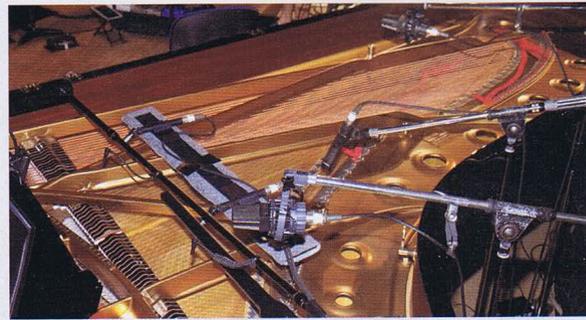
上で鳴っている音は、ほぼピアノの生音だけ」という状況になったので、客席とステージを合わせた、会場の全体音量をFOHで決めることになりました。ただ、こうした環境の方が、ピアノの生音にほかの音をどれくらいプラスすればいいのか判断しやすくなりましたね」

グランド・ピアノは、ふたを開いたときの反射により大きな音が鳴らせる楽器。しかし、今回は観客がステージ後方までよく見渡せるようにという配慮から、ふたを取り外して使うことになった。

「反射が無くなったので、弦の音を直接マイクで拾う收音方法を探りました。低音弦と高音弦が交差する部分には溝が走っているのですが、その溝の鍵盤寄りの部分を狙うとバランスの良い低音が得られます。高音に関しては、ハンマーからやや離れたところから拾っています。收音には、いずれもAKG C414 B-ULSを用いました。このマイクからは、ピアノらしい音が得られるんです。2本のC414 B-ULSの真ん中辺りには、SHURE SM57を立てています。これは、主にモニター用に使っています。SM57はC414 B-ULSに比べてかぶりが少ないので、モニターのピアノ音量をピンポイントで上げたいときに便利なんです」

3本のマイクに加えて、山寺氏は響板の裏にYAMAHIKOのピックアップを装着していた。

角松敏生



▲STEINWAYのグランド・ピアノにも、YAMAHAのピアノと同じマイキングが施された。写真手前と奥に写るのはC414 B-ULSで、その中間にSM57が設置されている。なお、C-414 B-ULSの奥に見えるAKG C451E×2は、モニター用に使われた

◀グランド・ピアノは、ふたを取り外した状態で收音された。写真は、ステージ下手に設置されたYAMAHAのピアノ。低音弦と高音弦の交差する部分には溝が走っており、そこに向けてAKG C414 B-ULSを立てることでバランスの良い低音を得たという。高音は、最も高い音のハンマーからやや離れた位置にC414 B-ULSを設置し收音。2本のC414 B-ULSの間にはSHURE SM57を立て、主に角松のモニターへ送ったという



▲山寺氏はグランド・ピアノの響板の裏にYAMAHICOのピックアップを設置。とても近い音が得られるそうで、空気感を帯びたC414 B-ULSの音に混ぜて使っているという。またハウリングを起こしにくいため、ピアノのモニター音量を上げる際も便利だそう



◀森俊之の演奏したオルガンHAMMON D L-112



▲73鍵のRHODES Mark I Suitcaseは、3名のキーボーディスト全員が演奏していた

◀MOOG Minimoog Voyager Electric Blue EditionやYAMAHA Motifといったシンセ類は、主に森が演奏。特にMinimoog Voyager Electric Blue Editionから繰り出されるシンセ・ベースの音色は圧巻だった

「ピックアップの音は空気を通っていないためナチュラルではありませんが、かぶりの多いPA現場でC414 B-ULSなどの音にミックスし、芯の部分をバックアップするのに最適なんです」

山寺氏は「今話したマイキングを、ここ3年くらい実践続けています」と話すが、そこにたどり着くまでには、長い道のりがあったという。

「30代のころ師匠にピアノの收音法を学んだのですが、その技術をまねるだけでは良い結果が得られないことに気づき、自分の形が見えるまで試行錯誤してきました。1回目の大賀ホール公演ではマイキングについて考え過ぎてしまい、個人的に課題を残す結果となりました。しかし、その後ジャズ系のライブ・ハウスに常駐する機会に恵まれ、あらゆる音楽のピアノのPAに携わったんです。また、去年はクラシック・ホールに常駐していたので、PAを通さないピアノの音を毎日聴いていました。その中で、技術的なことではなく「ピアノってこういうものなんだな」という感覚が身についてきたんです。ピアノと対決するのではなく、調和できるようにになりました。PAの仕事は楽器や機材、そして人の心と接するわけですが、対決と調和の境目は紙一重です。初めから対決姿勢だとそれ以上にはなりません。まずは、気持ちだけでも調和の方に持っていけたらと心掛けています」

大賀ホールのナチュラルな響きが 角松の音楽をより親近感あふれるものに

本番は、3名のキーボーディストによるインスト曲「P.C.H.」で幕を開けた。この曲は、小林信吾と友成好宏から成るデュオ＝Maochicaの作品だ。グランド・ピアノ×2台とオルガンにより奏でられる穏やかなハーモニーは、スピーカーからの出音を含んでいないかのように自然な響きだった。「P.C.H.」が終わると、角松が登場。ギターとピアノによるリズム的なフレーズがさえるアーバンナンバー「初恋」が披露され、会場は早くも総立ち状態となった。続く「The Best Of Love」は、ゆったりとした4つ打ちがブルービーな楽曲。角松の歌唱力の高さと山寺氏の音作りが相乗効果を生み、分厚いオケの中でも歌詞の細部までがハッキリと聴き取れた。コンサート後半部では、森俊之の演奏するMinimoog Voyager Electric Blue Editionがファンキーな「氷の妖精」や「リカー!!」などを披露。アンコールでは、甘酸っぱい歌メロが映える「NO END SUMMER」や感動的なバラード「What is Woman」が演奏され、全20曲/約2時間半の公演は終了。大賀ホールの響きとそれを生かしたPAが、角松の音楽をより身近なものに感じさせてくれた。

MUSICIAN
 角松敏生 (vo. g. prog)
 小林信吾 (ac.p. k. syn)
 友成好宏 (ac.p. k)
 森俊之 (org. k. syn)

SONGS
 ① P.C.H. (Maochica 曲)
 ② 初恋
 ③ The Best Of Love
 ④ RAIN MAN
 ⑤ You're My Only Shinin' Star
 ⑥ 風車
 ⑦ I Need You
 ⑧ Far Away From Summer Days
 ⑨ Beauty & The Beast
 ⑩ 燕 (Maochica 曲)
 ⑪ 君が代
 ⑫ IZUMO
 ⑬ 氷の妖精
 ⑭ リカー!!
 ⑮ I'm Lovin' You
 ⑯ 君のためにできること
 <ENCORE1>
 ⑰ 浜辺の歌
 ⑱ SKY HIGH
 ⑲ NO END SUMMER
 <ENCORE2>
 ⑳ What is Woman

STAFF
 企画/制作：ビーンズ
 後援：アリオラジャパン
 協力：桐生音協
 PA：山寺紀康 (フルスペック)、ヒビノ